

映画「ホペイロの憂鬱」

ビッグカイト相模原テーマ（応援歌）について

このたびは、映画「ホペイロの憂鬱」に関心をお寄せ頂き、誠にありがとうございます。
制作側で準備しましたサッカーチーム「ビッグカイト相模原」のテーマ（応援歌）につきまして、様々なご意見・ご感想を頂戴し、その反響の大きさに、制作チーム一同、正直驚いております。

「歌詞の内容が自虐的すぎる」「サッカーの応援歌っぽくない」といったご批判に関しまして、ご不快の念を抱かせてしまったことに、まずはお詫び申し上げます。

まずは本映画の企画が生まれた過程から説明させていただきます。

企画者の私自身、相模原市在住者であり、相模原市は決して魅力ない町と思っておはおりませんが、イメージのわきにくい土地であるように感じています。

そこで、「相模原市はこんな町なんだ、こんな魅力があるんだ」という具体的なイメージを持って頂くために、相模原市を舞台にした映画制作という企画を考えました。

井上尚登氏の小説「ホペイロの憂鬱」に出会ったのは、まさにそのような時期でした。

小説としても十分面白いものでしたが、サッカーの知識があればもっと面白いだろうな、と思える内容でした。この小説の映画化を企画した時から、ギオンスタジアムに出かけて観戦するようになり、SC相模原代表の望月重良氏の著書「もう一回蹴りたかった」を読んで、その誕生の経緯に深い感銘を受けたのでした。

「もう一回蹴りたかった」に、SC相模原誕生の経緯としてこのようなエピソードがあります。

飲食店主が、望月氏に対して、

「ぜひ、相模原市にサッカークラブを作って下さい。この土地は、みんなで盛り上がるものがないんです。日曜日に、子どもを連れていく場所もない。サッカーがあったら、町は盛り上がります」と懇願し、望月氏は相模原とは縁もない土地でありながら、今の子どもたちに、かけがえのないものを与えられる場を作りたいと決心して、クラブを立ち上げたとあります。

「ホペイロの憂鬱」に登場するビッグカイト相模原は、もちろん架空のクラブです。

ですが、そうした「盛り上がるものがない」土地に生まれたクラブであり、まったくのゼロからスタートしたクラブというふうに、映画の設定を作っていました。

ビッグカイト相模原の映画内での描き方や応援歌の歌詞について、監督、脚本家はじめスタッフたちと何度も協議を重ね、この作品にとってどのような応援歌がふさわしいのか思案し、作品のボルテージを上げるために、随所に創意工夫をこらしてまいりました。リアリティを追求するよりも、映画としての面白さを追求することを選んだからです。

自虐的すぎる歌詞、というご批判には、海外のクラブにしばしば「自虐チャント」「皮肉チャント」

が見られることに注目し、ビッグカイト相模原のサポーターたちはそうしたシャレの分かる人たちだと言うことを表現したかった、ということで、けっして相模原市や市民を軽視したりする意図はありませんでした。

歌詞としては冗談ぽく、軽い内容にとられることは確かですが、勝てないという現状に不安と不満を募らせながらも、「大丈夫、俺達が付いている。そんなに重く考えるなよ。リラックスだよ」というメッセージを、あの歌詞に込めたつもりです。

映画は、バラバラだった弱小チームが、選手のみならず、スタッフやサポーターたちを巻き込んで、一体となり、勝利する様を描いたもので、当初小馬鹿にしているように聞こえた応援歌が、チームが一球となるきっかけとなるシーンではまったく別の聞こえ方をする、という計算のもとに採用しました。

選手個人の応援パートが組み込まれているのも、ストーリーの進行上、必要と判断したためです。

これから撮影が行われることであり、くわしく公開するわけにはいかないのですが、単なるおふざけや軽さの味付けのためにあのような歌詞になったわけでは決してございません。

私達が、ビッグカイト相模原とは？ ビッグカイト相模原のサポーターとは？ という設定を具体化していくにあたり、上記のような思考過程を経てきました。

当方の力量不足によって、サッカーチームの応援歌としてのリアリティから離れ、様々なご批判頂いたことは真摯に受け止めなければなりません。

その上で、ビッグカイト相模原はこういうチームなんだ、それを応援するサポーターたちはこういう人たちなんだとご納得頂いて、ビッグカイト相模原サポーターとしてご参加頂けますことを心より願っています。

何卒ご理解賜りますようお願い申し上げますとともに、来る2月11、12日のギオンスタジアムで行われる撮影にご参加いただけますよう、制作者一同心よりお待ちしております。

平成29年2月6日

映画「ホペイロの憂鬱」

企画プロデューサー 小池 和洋